

9条護憲派の「日本つぶし」に警鐘 安曇野の著述家・吉澤国雄さんが新著

安曇野市在住の著述家、吉澤国雄さん（72）が、憲法九条擁護勢力の「破壊衝動」による「日本つぶし」に警鐘を鳴らす新著『九条護憲亡国派に諫言（かんげん）す』（東洋出版）を上梓（じょうし）した。国家に真の「平和」をもたらすためには何が必要なのか正しく理解するのに、あ薦めの一冊だ。

同書で吉澤さんは、安倍晋三政権による安全保障法制に激しく抵抗した勢力の狙いや深層心理を明解に分析し「日本国を守るには日本国民が自ら日本国を守ろうとする気概が重要であるが、九条護憲派が亡国の危険を招来している」と指摘。これを主導する左振りベラル勢力について「邪悪な怨念」にとりつかれた「ガン幹細胞」と切り捨て、「（ガン細胞となった）『自虐史観』中心の戦後教育や『朝日』『岩波』を代表とする『反日』マスコミ報道が国民に与えた影響はきわめて大きい」とも訴える。

そのうえで左派リベラル勢力が錦の御旗にする「反戦平和主義」のルーツやその落とし穴について、歴史的事実や中国の軍事的脅威という現実を踏まえ、鋭く検証している。

同書のなかで吉澤さんは、日本人を安全保障へのスタンスから「A層」「B層」「C層」「D層」の4つに分類。特定メディアを含む左派リベラル勢力のトラップ（罠（わな））に陥る覚悟なき“世論”の跋扈（ばっこ）によって「普通の国」になりきれない日本の「今」を分かりやすく解説する。

吉澤さんは松本市出身で早稲田大法字部卒業。予備校講師を経て「著作、論評を通じ日教組が主導する自虐史観中心の戦後教育の悪弊を正したい」として執筆活動を続けている。「予備校時代に、中庸なのに周囲に『右翼』と呼ばれていた」と笑い飛ばす。主な著書に『真正保守がこの国の活路をひらく』『中国の心理が読めれば、対中国戦略は見えてくる』（いずれも東洋出版）などがある。

『九条護憲亡国派に諫言す』は228ページ、1500円（税撞き）。